

市民研会員から寄せられた

2023年私のおすすめ3作品

締め切り 2024年2月13日、到着順に掲載

市民科学研究室は毎年年末になると、会員の皆さんから「私のおすすめ3作品」という原稿を募集しています。その年に読んだ本（雑誌や漫画も含む）や観た映画やTV番組、聴いたCDや足を運んだ展覧会やライブなどで、多くの人に勧めたい3作品を挙げていただき、それらにコメントを付けてもらう、という企画です。2007年から始めて、毎年『市民研通信』の原稿とさせていただいています。

●杉野 実

1◆椿玲未『カイメン』

乾敏郎・坂口豊『脳の大統一理論』（以上、岩波科学ライブラリー）

椿さんのは「世界でもめずらしい一般むけの海綿概説書」だそうで、海綿と共生する社会性エビや固着性二枚貝の話などもおもしろかったのですが、一番興味をひかれたのは「海綿は細胞のならびを少しずつずらして、形をかえながら移動することもできる」というくだりでした。で、「そういう細胞のネットワークにモニター機能をもたせれば、高性能バイオコンピュータともいうべき脳ができる」と考えれば、乾さんらの研究にもつながるでしょう。そちらの方は、「身体から来る情報がいつも脳に帰ってくる」という観点から、随意運動だけでなく、自閉症や統合失調症など病気のことまで説明しようとしています。

2◆サラ・ロレンツィーニ『グローバル開発史』（名古屋大学出版会）

スー・スチュアート・スミス『庭仕事の神髄』（築地書館）

米欧ソ中（日本はほとんど言及されていない）の途上国援助を比較したロレンツィーニさんの本は、開発の「実態」を知りたい人にとってはものたりないかもしれませんが、東側ばかりか西側においてさえも、政府開発援助なるものが、みごとに「理念先行」なものであったことを伝えています。「植物を育てることが人の心をいやす」との事実から出発するスミスさんの方は、一見そんな「公式の」開発事業とはまったく無関係にみえます。ですが学校や刑務所に園芸をとりいれて成功しているといった事例は、これまでの「開発」が見落としていた、ある重要な側面を示しているように思えてなりません。

3◆別冊『環』「図書館・アーカイブズとは何か」(藤原書店)

劉慈欣・宝樹『三体(シリーズ)』(早川書店)

莫理斯(モリス)『弁髪シャーロック・ホームズ』(文芸春秋)

「中国みたいな自由のない社会で科学技術は発達しうるのか」という問題を、在日中国人歌手の荘魯迅さんらと議論したことがきっかけとなって、以上のような本を読みました。別冊『環』など読んで印象づけられたのは、「ヨーロッパの大学はもともと学生や教師の自治組織であった」という事実ですね。荘さんは音楽家らしく、「科学も芸術も」自由がなければ育たないといわれるのですが、そういわれて中国のSFや香港の推理小説を読んでも、なるほどそれなりの発見がありました。中国の作家は「あんな政府に負けず」いい作品を書いているのですが、さてかの国の科学者は…どうするのでしょうか？

●吉岡 寛二

1◆「女よ！大志を抱け」(青山千春・著、2023/12/10、ワニ・プラス)

著者の青山千春さんは、東京海洋大学の特任准教授です。私がメタン・ハイドレードというのを初めて知ったのは、約17年前に国立環境研究所(つくば)内で展示をみたときです。その時の説明には「砂層型」「太平洋側」のこしか書かれていなかったのですが、著者は、主に「表層型」「日本海側」について説明しています。

著者は、多くの困難にぶち当たったにもかかわらず決してあきらめることなく現在に至りますが、大きな夢を語っていて本当にすばらしい方だと思います。「地球温暖化対策にもっと貢献すべきだ」と考えられている方には、興味深い知識を得ることができると思うので、超おススメです。日本政府もまじめに動き出しており、(純粋な研究段階ではなく)2030年には商用化を始めることになっています。(とはいっても実用化・実用段階はまだ先です。)

2023年に読んだ本の中では、私にとってはダントツでした。1800円+税です。

2◆世界の教科書シリーズ43「ドイツ・フランス共通歴史教科書【近現代史】ーウィーン会議から1945年までのヨーロッパと世界ー」(2016/2/29、明石書店)

独仏の2か国が共通歴史教科書を作成していて、独仏の高校生たちにどう教えているのかということに興味があって購入しました。購入したのは数年前ですが、購入時は第二次世界大戦のこと、特に①フランスのヴィシー政府、②日本のことを若者にどう伝えようとしているかということに興味があったので、それらの部分を読んだ後はお蔵入りしていました。

一昨年にはロシアによるウクライナ侵攻、さらに昨年にはハマスによるイスラエルへの攻撃があったので、第一次世界大戦前後のことをもっと知りたいと思いました。

ちょうどこの本が手元にあることを思い出して、植民地支配をしていた帝国主義時代から第一次世界大戦のところを読みました。「独仏からみた歴史認識」を知ることで、日本からの視点では全く見えていなかったことも知ることができました。

個人的には今年のナンバー2でした。5400円+税なので、おススメとはいうには難がありますね。

3◆映画「ラーゲリより愛を込めて」(2022/12/9公開、二宮和也主演)

特に今年は、ナンバー3を何にするか迷っていました。

2023年2月に映画館で見たのですが、その時はおススメ3作品に入れるつもりもなく、すっかり忘れていました。たまたまですが、年初に海外旅行したときの機内(ベトナム航空)で、2度目の視聴をしました。主人公の遺書を4人が分担して丸暗記し、のちに家族(北川景子他)の元を訪れるくだりでは(私の場合にはよくあることで)涙がこぼれてきました。特に名作というのではなく、お決まりのお涙頂戴映画です。

とはいつても、辺見じゅん氏のノンフィクション小説「収容所から来た遺書」を原作にした映画です。非常に厳しい社会環境・生活環境において、ある人たちの生き様を描いている映画というのはいいですね。

●倉本 宣

1◆森達也(編)五十嵐太郎・雨宮処凛・今岡直之・葛西リサ・渋谷哲也・武田砂鉄・田中元子・朴順梨・福原麻希・森達也・安田浩一(著)(2023)『あの公園のベンチには、なぜ仕切りがあるのか?--知らぬ間に忍び寄る排除と差別の構造』(論創ノンフィクション)278ページ

私はこの本の著者たちとは少しずれた理由で公園のベンチの仕切りに関心があった。現実の世界に役立つ生物学を目指して生態学研究室に進学したものの、ジェネラリティのある理論は自分には見つからないしおもしろくもなかった。区画整理や都立公園の中の自然保護上重要な場所の保全のための生態学はおもしろかった。そこでは、官と民が押し合いへし合いしながら、答えを探していた。

私が実務から離れるころになって、仕切りのあるベンチが現れた。その時代には都立公園には巡視という職種が置かれていて、人間的なやりとりができるはずなのに、なぜ物理的な障壁に頼るのか不思議だった。公園の入口の車止めも、自転車は入れるけれども、オートバイは入れないものが工夫されている。自分がかつておもしろいと思った都立公園はどこに行ったのだろう(都立公園150周年の2023年に思う)。

2◆小池伸介(2023)『ある日、森の中でクマさんのウンコに出会ったら ツキノワグマ研究者のウンコ採集フン闘記』辰巳出版 288ページ

私は雪の上のツキノワグマの足跡と、自分の足跡が交差していたことに気づき、ツキノワグマが生息している山地でのカモシカ調査をやめることにした。私の研究室では何をテーマにしてもいいことにしているのだが、熊と鯨は指導できないことにしてきた。このところ、樹木限界より上の自然とか、マイクロプラスチックで迷惑している東京湾の生きもの全部を助けたいとか私の手に余るテーマを考える学生がいる。この本を読んでいて、どうしても熊の研究がしたいと言って小池研究室に進学した学生の顔

が目に浮かんだ。彼女のテーマは大事なことであったとわかったからだ。

3◆小島渉(2023)『カブトムシの謎をとく』(ちくまプリマー新書434)224ページ

毎月 zoom 連続講演会を開催しているので、いつも演者を探している。小島さんは、4年生がみつけて、私に動画を見せてくれて講演をお願いした。私が4年間住んでいた伊豆大島にはカブトムシがいなかったが、首都圏はカブトムシが多い地域だそうだ。

生田緑地の一部を構成する川崎国際生田緑地ゴルフ場が催しの際にカブトムシの幼虫を配付するので、カブトムシを愛玩動物としてではなく野生生物としてみてほしいというメッセージとともにこの本を送っておいた。生田緑地は、「持ち込まない、持ち出さない」という生田緑地憲章を持っている。カブトムシの配付は憲章に違反するという見解もあるし、経験の消失の時代において子どもたちが生きものに接する機会を奪ってはならないという見解もある。東急ゴルフリゾートと東急の造園会社である石勝エクステリアはどのような検討を経て配付するかしないかを決めるのであろうか。プロセスが興味深い。

●大沼 潤一

1◆丸山宗利著「昆虫学者、奇跡の図鑑を作る」(幻冬舎新書)

2022年7月に発行された「学研の図鑑 LIVE 昆虫 新版」の総監修者の丸山宗利さんが図鑑制作の顛末を著した本です。この昆虫図鑑の特徴は、昆虫を生きたまま撮影され、掲載されているという点にあります。

昆虫の撮影はプロ写真家ではなく、全国の昆虫愛好家が行いました。最終的には7000種の生体が撮影され、前述の数の2800種が図鑑に掲載されました。私もこの図鑑を購入し、自然観察会における昆虫探しに役立っています。

筆者をはじめ制作に関わった方々の虫探し、撮影などの活躍は読みごたえがあります。それだけではなく私が筆者が優れた市民科学者と思った点は、以下のような記述からです。P.183から引用します。

…子供向けの文章というのは本当に難しい。今回、文章を担当していただいた皆さんに私が伝えていたのは、「正確さも大切だが、細かい例外にこだわりすぎるより、本質的な部分を簡潔に説明することが重要」ということだ。

…中略…私はNHKの「子ども科学電話相談」というラジオ番組にも出ているが、いつも回答には迷い、専門家たる自分との戦いがある。

「細かい例外にこだわるな」というのは、そのような経験のなかで培った子供向けの文章の重要なコツだと思っている。

…中略…教育や普及啓発において、物事を長くても正確に説明することこそ「誠実」だという見方もあるだろう。しかし、短く端折ってでも、伝えるべきことをしっかり伝えることも誠実さである。両立できれば良いがそれは容易でないことが多い。これは常に問い続けなければならない課題だと思う。

市民科学者の素質として大切なことが述べられていると思いました。

2◆斎藤幸平著「ゼロからの『資本論』」(NHK出版新書)

NHK Eテレの「100分de名著『資本論』」のテキストに加筆された書籍です。カール・マルクスが「資本論」にて予想した資本主義社会崩壊後の社会の在り方についての解説書です。筆者は、この本が「資本論」を資本主義批判の書物というだけではなく、 Kommunismus という視点から書かれた入門書だと述べています。

筆者は、「資本主義の本質は、商品の等価交換の裏に潜んでいる労働者の搾取による余剰価値生産にある。この問題を解決するためには、所有の形を単に私有から国有に変えるだけでは不十分で、搾取をめぐる問題を労働の問題として考えないとソ連と同じ過ちを犯すことになる。資本主義を乗り越えるために必要なのは、搾取のない自由な労働のあり方を生み出すことなのだ」と述べています。

自由な労働としてマルクスが念頭に置いていたのは労働者協同組合でした。日本でも2022年10月に「労働者協同組合法」という法律が施行されています。筆者は、この共同組合では労働者が自分たちで出資し、共同経営者になり、雇われるのではなく、主体的に、かつ民主的に会社を経営ようになる、と述べています。また晩年のマルクスが資本主義以前の「共同体」についても熱心に研究していたと指摘しています。なぜなら前資本主義社会の共同体では、伝統や宗教、土地の共同所有、くじ引きによる割り振りなど様々な手段を使いながら、富の偏在化を防いでいたからです。富が偏在すると、権力と支配—従属の関係が生じるからだ」と筆者は述べています。

私たちの抱える経済問題、環境問題を解決するために必要な、ある種の「哲学」を感じました。

3◆歴史探偵(2023年8月9日放送)「消えた原爆ニュース」

広島・長崎の原爆被害は、被爆直後は報道されていたが、連合軍の占領開始後は規制が始まり報じられなくなった。報道規制が解除されたのちもメディアは自主規制して、原爆被害は報じられなかった。

そのような状況の中、原爆被害を知った京都大学の学生たちが1951年7月に「原爆展」を開いた。ただし原爆展開催にあたって京都大学が原爆被害の資料の提供を拒んだため、学生たちは広島の被爆者たちなど外部から資料集めを行うなど、展示物を手作りで作成した。会期終了後には展覧会で使用されたパネルが貸し出され、各都市でミニ原爆展が開かれた。

学生たちの行った社会運動が、占領期間終了を待って刊行され話題となった『アサヒグラフ』の「原爆特集号」(1952年8月)に繋がったのではないかと解説されていました。私は社会運動の大切さを実感しました。

蛇足ですが、原爆被害については報道されるようになりましたが、日本の政府やメディアが核兵器について、アメリカ軍に忖度する傾向はその後も続いていて、例えば、1965年12月5日に南西諸島近くの、当時の公海上で米空母タイコンデロガから1個の核兵器を搭載したA-4航空機が海中に滑り落ち、パイロット及び核兵器とともに水深16000フィート以深の海底に沈みました。当然、小笠原及び沖縄返還後は日本の領海内に核兵器が沈んでいるわけですが、日本政府は調査もしないし、アメリカからの情報提供も形だけのものとなっています。

●橋本 正明

1◆映画『ヒトラーのための虐殺会議』 <https://klockworx-v.com/conference/>

2023.01.20に全国公開されたこの映画は、全編がとある湖畔での会議の始まりから終わりまでを、様々な登場人物が様々な視点や見解から祖国を憂いた愛国心の塊と言っていいほどに主義主張を唱え、激しく激突する様を描いた作品である。

しかしながら序盤からその最後まで、終始一貫として描き出されるその彼らの憂い全ては【総統とアーリア人のため】、ユダヤ人の絶滅政策についてとことん意見を交わしたその舌の根も乾かぬうちに、平然と新たに授かった生命の誕生を祝福したり、自分たちの職場の環境状況について嬉しそうに語り合ったり…。

この会議は重要ではあるが、これはあくまでも【日常の延長線上にある会議の一つ】に過ぎない。彼らにとってユダヤ人は【人間ではない】、家畜と同等かまたはそれ以下ですらある。これがレイシズムの恐ろしさである。

日本でも江戸時代から士農工商という身分制度の他に主に農業階級のガス抜きとして設けられた階級によって被差別部落がその位置にあり、いまだにその部落出身であるというただそれだけでその負の影響を受け続けている人々が存在している。また、北海道のアイヌ民族について誹謗中傷する輩がいるのはまだ記憶に新しいところである。

世界を見渡しても、インドのようなグローバルサウスを代表する新興国であるインドでも古くからハリジャンという身分が設けられていた。アメリカでもつい前世紀の中頃まで平然と人種隔離政策が採られており、現代においてさえも白人至上主義に染まる人間が後を絶たない。

これは私たちの中に潜む【大衆の支持によって思考停止した際に生まれる、正当化された狂気】をあらゆる角度から浮かび上がらせた物語であったと思う。

2◆NHKスペシャル：日本人は農なき国を望むのか～農民作家・山下惣一の生涯～

(初回放送日：2023年9月23日) <https://www.nhk.jp/p/ts/M71N156RVY/episode/te/BM5XQ6136X/>

放送の前年2022年夏、佐賀の農民作家・山下惣一氏が亡くなった。

『農産物の輸入自由化に反対の立場をとり、「地産地消」「身土不二」という言葉の大切さを訴えた山下さんの生涯を描く。』という謳い文句で放送されたこの番組であったが、それまで全く山下惣一という人物を知らなかった私は、その生き方に共感すると共に、その思想にいままさに共鳴しつつある。今更ながらかも知れないが、これから本格的に彼が追い求めた理想や足跡をたどり、私の求める道筋に照らし合わせてみたいと思う。

仏教用語でもある【身土不二】は、現代の歪み全てを全て逆に表現しうる唯一無二のパワーワードであると私は確信して止まない。ここ数年、このワードが注目されつつあるようであるが、一過性のものとしてではなく、あらゆる現代の事象への展開について今後より深いレベルでの考察と実践を試みていきたいものである。

3◆富山市ガラス美術館（富山県富山市西町5番1号）

<https://toyama-glass-art-museum.jp/about/architecture/>

秋に北陸を観光旅行した際に立ち寄った富山市の重要な観光スポットの一つであるガラス工芸の美術館である。今をときめく建築家である隈研吾氏が設計を手掛けた建物建築のコンセプトは、「ガラスの街とやま」を目指したまちづくりの集大成として、富山市立図書館本館などが入居する複合施設「TOYAMA キラリ」内に整備し、富山市の中心市街地に位置することから、文化芸術の拠点としてだけでなく、まちなかの新たな魅力創出を担います。】

となっており、とかく【御影石、ガラス、アルミの異なる素材を組み合わせ、表情豊かな立山連峰を彷彿とさせる】外観の様子ばかり HP では強調されているが、実際に訪れてみると残念ながら外観の様子は建物が大きいのと隣接するビルなどでよく判らなかった。

しかし内部に入り、2Fフロアから吹き抜けを見上げると【富山県産材のルーバー（羽板）を活用した温もりのある開放的な空間】が私を圧倒した。これぞ木造建築の美しさをふんだんに散りばめた世界に誇る木造建築の素晴らしさを表現した一つの芸術作品であると、広大な吹き抜け空間と天井から差し込む光に圧倒されると同時に日常的にこの建物に入っている図書館を利用できる富山市民を羨ましく思った。

新年早々の能登半島地震の影響でしばらく館内を点検していたようであるが、再開したようである。政府の北陸観光支援策も実施されるようであるので、北陸を旅行される際にはぜひ訪問を検討されるべき芸術作品として推薦したい。

●谷 俊一郎

1◆山尾三省（1988）「聖老人」野草社、395 ページ、2,500 円+税、ISBN:978-4-7877-8880-1

著者は、日本のヒッピー文化の先駆的な活動を行った元学生運動家で、詩人である。

自然志向の活動や詩を中心として、宗教や哲学にも深い造詣を持つ著者の魂の咆哮のような本で、未来に対する閉塞感を強く感じる最近にこそ通用すると思う。

現在の有機農法や無農薬・無肥料農法の開祖ともいえる福岡正信氏の著作も紹介されており、農家と都心の購入層の主婦とのやり取りもおもしろい。

「聖老人」とは、著者が移住した屋久島に住む樹齢7200年とも言われる杉の木のことである。

販売元は文京区本郷2-5にある「新泉社」で、ここは絶版となっても不思議ではない本をいくつも扱っている。

2◆正木高志（2019）「地球のマユの子供たち」南方新社、124 ページ、1,200 円+税、ISBN:978-4-86124-407-0

福島県の海辺で育ち原発事故後に奄美大島へ移住した子供たちがインド旅行中に聖者と会い、心の成長をとげる小説で、宗教や哲学の切れ端がパッチワークの様に散りばめられている。

断末魔の悲鳴を上げる今の文明から重い転轍を切り替えなければ終末を迎えるというような主張が、全体を通して地下水脈の様に深いところを流れている。

主人公の一人が「フクシマはオリンピックというフタで覆われてしまいました」と吐き捨てるように言う言葉が重い。

3◆馬場朝子 (2022) 「ロシアの中のソ連」現代書館、189ページ、1,800円+税、ISBN:978-4-7684-5925-6

著者はモスクワ大学に留学し、社会人として数十回ロシアを訪問している。ロシアから見たアフガン侵攻とウクライナ侵攻に関する著者の慧眼には感服する。日本のメディアが報道している内容とは全く異なり、他国の文化や伝統は無視し裏で糸を引く欧米の要求を押し付けるだけの浅ましい姿勢を感じとることが出来る。革命により王国からソ連となり、ロシアとなった様々な人種で構成される雄大な国家と、人間臭い国民の生活を垣間見ることが出来る。

●桑垣 豊

1◆『人間と労働の未来 技術進歩は何をもたらすか』 中岡哲郎 (1928-2024) 中公新書 234 1970年

著者の中岡先生は、本年2024年1月6日にお亡くなりになりました。そんなに親しくしていたわけでもなく、長いこと会わないままでしたが、個人的に話をしたことがあるので、中岡先生と呼ばせてもらいます。

「いまわれわれの前に出現しつつある奇怪な社会の底を流れている法則を探りあてないかぎり、身動きがとれなくなってしまう」と、「あとがき」にあります。技術進歩が、労働から自由をうばい、人間をがんじがらめにすることで、生産力を高めて「豊かな(はずの)社会」が実現する。この本の出た50年前、すでに「自発的に労働意欲を高めるように管理する」方法を経営者が模索する姿を描いています。しかし、どこまで行っても「自発性の管理」という発想自体が矛盾しています。当時、経営者の間では「砂利意識」と呼び、どうしても排除できないものとして問題にしていたといいます。

さて、21世紀の現代、この問題はどうなっているのでしょうか。自発的に問題意識を持って自分で調べて結論に達する、ことになっています。組織の中の仕事・労働でもそうなっていることに。しかし、ネット空間の情報は巧妙に管理されていて、ファクトチェック、誹謗中傷、プライバシー侵害という名目で都合の悪い情報は消され、残った情報をかき集めると、あらかじめ決まった結論に落ち着くようになっているのではないか。その一方で、匿名をいいことに、あることないこと書き放題のネット社会は、確かに問題のある情報を放置できる状態でもない。

中岡先生の言う「出現しつつある奇怪な社会」は、50年後の今も入り口に立ったにすぎず、これからもますます社会を奇怪なものにしていきそうです。中岡先生の描いた未来像を、まだ私たちは超えることができません。

中岡先生の関心は、この本のあと環境問題にうつり、やがて1980年代には途上国の工業化問題へと大きく舵を切ることになります。中岡先生の技術論のさらなる発展を期待していた人は、がっかりしたでしょう。しかし、そういう人に中岡先生なら「そんなに関心があるなら自分で考えたらいい」と答るでしょう。

私は、中岡先生の授業を半年受けたことがあります。途上国の工業化を、日本の明治以後の工業化を通して考えるという内容です。授業では、日本の工業化の歴史は、いかに間違った通説の上に成り立っているか、ということをおもひ知らせるものでした。私が経済の研究をするにあたって、リサイクルを調べるにあたって、多くのことを学ばせてもらいました。

「そんな技術、先進国の技術をなぞっただけだ」とよく聞きますが、実は「なぞるだけでも大変」なのです。官営製糸工場は軌道にのったので民間に安く払い下げた、と習ったかも知れませんが、実態はしばしば機械が停止してうまく行かず、仕方なく払い下げた。生産物の売上よりも、工場見学の入場料のほうが多かった。いかに常識や、政府の手前みそを信じてはいけないか、具体的個別に調べることから始まるといけないか、技術を知るといことはそういうことだと知りました。実践はむずかしいですが。

私が朝、大阪の学校に通うとき、となり駅から乗られる中岡先生と同じ電車に乗り合わせることがあり、20分ほど話ができたのは貴重でした。もっと聞いておくべきことがいくらかあったのに、と思います。

中岡先生には、1990年に一度だけ正式にインタビューしたことがあります。学生が自主的につくっていた「大阪大学新聞」(縦題字※)に記事を書くためです。テーマは、1951年11月12日におきた京大天皇事件です。京都大学の自治会「同学会」が、天皇への質問状を書いたことをめぐり大学や社会の反応が、事件になってしまいました。同学会からの依頼で質問状の原稿を書いたのが、中岡先生でした。この事件が一場面として登場する、城山三郎の小説もあります。

【関連文献】 『大義の末』城山三郎 角川文庫 1975年

※「大阪大学新聞」(同名の横題字)は、大学当局寄りの新聞。

2◆『社会学 わたしと世間』加藤秀俊(1930-2023) 中公新書2484 2018年 780円

加藤秀俊氏も昨年2023年秋に亡くなっています。中公新書をはじめたくさんの著書があり、1冊は読んでいるという人も多いのではないのでしょうか。社会学者である著者が、社会学という書名の本を書く。大変そうだけど、おもしろそうでもある。

著者の論の進め方の特徴は、いくつもの事実から帰納的に、つまり事実を積み上げて、全体像なり、抽象的なことの説明を試みることです。だから、副題は「わたしと世間」となっています。ところで、社会学はつかみどころのない学問です。著者は、そこから始まって私にとっての社会学をつぎつぎ展開します。個別の話が、いつの間にか普遍性を帯びる、つまりいろいろなところで通用する話になっていきます。

「みんな」という表現を「第2章 集団」であつかっています。「『みんながそう言っています』って、いけど、みんなってだれ。」と批判する人がいます。たしかに、自分が多数派だと強調して、自分の意見に従わせる手段にすることがあります。しかし、著者はそのような説教よりも、どのようなときに使

うかという観点から考察します。身の回り40~50人程度ではないかと言い、自分がすぐに名前や顔を思い浮かぶ範囲だと説明します。そして、そのようなことばは外国にもあり、共通点が多いと指摘します。

私は必ずしも加藤氏の考えに賛成するばかりではないのですが、その方法論には学ぶべき点がたくさんあります。それに、わかりやすい文章のすぐれた手本にもなります。そのわかりやすい文章のおかげで、加藤氏の本を読むとたくさんのことが学べます。

全集が出ているので、著者の研究結果を数多く読むのは簡単ですが、てっとり早くは、著者自身の築いた「加藤秀俊データベース」がネット上にあるのでご覧ください。絶版になった著書の全文も載っています。SNSも含めて亡くなる直前まで、発言を続けられました。

【参考】加藤秀俊データベース <http://katodb.la.coocan.jp/>

3◆『コロボックルに出会うまで 自伝小説 サトルと「豆の木」』

佐藤さとる（1928-2017） 偕成社 2015年 1800円

先日、佐藤氏が2017年2月9日に亡くなったことを知りました。まもなく、ちょうど7年になります。

小学生のとき、京都の百貨店で『マコトくんとふしぎないす』（佐藤さとるぶん、村上勉え）を母に買ってもらいました。書名と村上勉氏の表紙の絵が気になって、平積み（ひらづみ）になっているこの本を手にとりました。母から「買ってあげようか」と言われ、中身をほとんど見ないうちに買ってもらいました。身近にある不思議な話が好きだったので、すぐに読み終わりました。奥付（おくつけ）を見ると昭和44（1969）年発行とあり、買ったとき平積み（新発売）だったので、この年に買ってもらったことがわかります。村上勉氏は、こどもの本を読まない人でも、記念切手で知っているかも知れません。

中学生のときに、講談社が文庫を創刊しました。しばらくすると、佐藤氏の「コロボックル物語」シリーズも講談社文庫から出るようになり、安く手に入るようになりました。早速、買って読むことにしました。著者が子供のころに育った、横須賀の町近くの山や谷が舞台です。今回、紹介する本は、この物語ができるまでの自伝です。

著者が横浜市役所の職員だったときのこと、中学校の数学の先生だった時代のことが書いてあります。私は最近、横浜のことが知りたくて、神奈川県立近代文学館や三溪園への行き帰りに、本牧（ほんもく）地区をあちこち歩きました。著者がこの場所をいろいろ訪ねる場面が、この本に出てきます。だいぶ昔に廃止になった横浜市電で、仕事のため、あるいは作家としての活動として、いろんなところを著者が訪れる様子が、歩いてみると70年後の今でもうかがい知ることができます。

戦争直後、本牧にはたくさんの米軍住宅がありました。今も根岸駅の北に残っています。この文章の締め切り（2月13日）のころには、根岸の米軍住宅の様子を見に行くことにしています。そのとき、戦前の競馬場跡も通りますが、佐藤氏がここを訪れる場面もこの本にあります。1980年代中頃には、本牧の多くの米軍住宅地が日本に帰って来て、しばらく廃墟になっていました。その様子は、ドラマ『あぶない刑事（デカ）※』にたびたび出てきます。

この本は、「佐藤さとる」を知らない人が著作・童話を読むきっかけになります。昔の横浜を知ることできます。著者が、長崎源之助氏と市電で平塚武二氏に会いに行く場面は、文学史の貴重な一頁です。

【関連図書】『はしれ ぼくらのしでんたち』長崎源之助ぶん 村上勉え 偕成社 1974年 680円

※今年2024年、何度も最後まで言っていたはずの『あぶない刑事』の新作映画の上映があるようです。米軍住宅の廃墟は、出てこないでしょうけど。

●上村 光弘

1◆福島智（2015）『ぼくの命は言葉とともにある（9歳で失明、18歳で聴力も失ったぼくが東大教授となり、考えてきたこと）』致知出版社

著者の生き立ちを描いた実話の映画『桜色の風が吹く』（<https://gaga.ne.jp/sakurairo/>）を見て、興味を持って読んだ。

盲ろう者として初の大学合格、そして東大先端科学研究センターの教授になるのはすごい！盲ろう者であっても読むことや話をするのをあきらめずに、それを研究開発していつている。コミュニケーションは生きる上で絶対に必要、コミュニケーションは心の酸素といつている。こういう人がいることに励まされる。

2◆斎藤詠一（2023）『環境省武装機動隊』実業之日本社

気候変動で海面が上昇した近未来の日本についてのSF。「環境は人命に勝るんだ！」（帯のキャッチコピー）にあるとおり、自然保護が最大の正義とされ、環境省は武力行使を厭わず規制できる環境開発庁（EDRA）を設置。ある事件を解決したと思われたが……

3◆伊与原新の作品

2023年に読んだ本（『お台場アイランドベイビー』『プチ・プロフェスール』『ルカの方舟』『博物館のファントム』『梟のシエスタ』『蝶が舞ったら、謎のち晴れ 気象予報士・蝶子の推理』『コンタミ 科学汚染』『磁極反転の日』）は全部おもしろかった。

少しずつ傾向は違うが、それぞれ科学を扱っているのが良かった（論文不正、エセ科学、研究室のヒエラルキー、デニソフ人など）。市民研のみなさんにピッタリと思います。

番外◆黒川伊保子（2020）『女と男はすれ違う！ 共感重視の「女性脳」×評価したがる「男性脳』』ポプラ新書197、ポプラ社

脳科学からみると、男性脳は正義と使命感、女性脳は愛と共感で回っている。だからなかなか言葉が通じない。すれちがってイライラしている女性へのお助け本。相談で返す、最初に目的を伝える、など具体的に指南。

著者の黒川さんのプロフィールは以下を参照してください。

<http://ihoko.com/profile>

NHKのラジオ（R1）、毎週金曜日の「ふんわり」パーソナリティ（1週間なら聞き逃し番組の視聴ができる）。話を聞いて面白いと思って、本を読むようになった。

●角田 季美枝

1◆星野智幸（2021）『植物忌』朝日新聞社、224 ページ、1600 円+税、ISBN 978-4022517609

2022年の私のおすすめ3冊のひとつ、藤原辰史（2022）『植物考』（生きのびるブックス）で紹介されていたSF作品（短編集）。藤原2022で紹介されているのは「スキン・プランツ」。収録されている作品の中では私もこれが一番おすすめだ。

最初は唐草模様のタトゥー代わりに本物の草をはやしてみようと何十年もの研究を経て、人のDNAと草のDNAの融合技術に成功したところから始まった……その技術の発展や実用化の進展で「スキン・プランツ」の市場規模はどんどん膨らみ、花が咲くスキン・プランツも開発されるようになった。しかし、その結果、スキン・プランツを植えた人間の性欲が消滅した。そして時間が経ち、スキン・プランツの進化もあり、人間の赤ん坊をした実がなる植物もできるようになった……

「スキン・プランツ」以外では、「人間でいたら腐って死んでしまうので、青虫になった」男の子の独白でつづられる「ディア・プルーデンス」、植物転換手術を取り上げた「ぜんまいどおし」、人間を食用とする植物と人間の闘いを描いた「ひとがたそう」など、全11編（あとがきも小説作品と境がないので、それを入れれば12編）。人間以外（食用植物になってしまった「人間」など）の世界の見え方が、個人（もはや「人」ではないのだが）的な関係から描かれていておもしろかった。

2◆テッサ・モーリス＝スズキ（伊藤茂：訳）（2014）『日本を再発明する：時間、空間、ネーション』以文社、308 ページ、2800 円+税、ISBN 978-4753103195

自然観とは何？ 日本特有の自然観や日本人の自然観があるのか？ そもそも日本って？ 日本人って？ ということを考えるのに、非常に適している。というのは、「日本」「自然」「文化」「人種」「ジェンダー」「文明」「グローバリゼーション」「市民権」という順に構成されていることもある。おそらく日本の教育では、ふだん「自然」を考えるのに、「市民権」まで掘り下げるといった思考方法をとることがないからだ。ある土地に生まれた人間がどのように自然と向き合っているのか、国民国家以降はナショナル・アイデンティティ抜きには語るができないし、ネーションを考える私とはいったい何者？と考えるをえない。古今東西の文献を駆使して整理しているため、思想的にたどるにも便利。索引も充実している。

3◆川崎の社会教育を考える会編（1987）『「線路はつづく」・・・南武線縮刷版』川崎の社会教育を考える会、684 ページ

2023年10月13日、市議会で条例改正案が可決、川崎市の市民館・図書館への指定管理者制度導入が決定になった（角田補注：条例で明文化されていないが、川崎市は市民館を社会教育法の公民館とし

ている)。指定管理者制度導入後について考えるために、川崎市の社会教育の歴史を学びたいと、川崎市立図書館の郷土資料コーナーにある文書や資料をいくつか読んだ。その中で市民の熱量を最も感じたのがこの冊子である。川崎の社会教育を考える会は、川崎の社会教育を「上からではなく住民と一緒に創る」ために住民が職員と作った団体で、「南武線」はその機関紙である。1977年の創刊から1987年の終刊（廃刊）まで100号の縮刷合本である。ほとんどガリ版（たぶん）で、学習会（川崎市内開催に限らない）、市民館運営審議会など会議の報告や予定、グループ紹介、学習会などに参加しての率直な感想が、メインの内容である。

社会教育は戦前、国民教化に加担したが、敗戦後、戦争につきすすんでいった歴史の猛省のうえに構想された。社会教育法では社会教育は学校教育を除くすべての教育と定義されており、幅広い。しかし、川崎の社会教育を考える会はじめ、川崎の社会教育は市民発というところが大きかった。「南武線」発行期間は高度経済成長期と重なる。市民による公害運動や消費者運動などもさかんだったころである。「南武線」発行はなぜ10年で終わったのか。指定管理者制度導入で変質するのが確実にされた川崎市の社会教育の今後を考えるためにも、市民による社会教育創造の運動の歴史を読み解きたい。

蛇足だが、地元の公共図書館で郷土資料コーナーに足を運ぶことはいままでそうなかった。しかし、実際に地域の歴史をひもときようと思うと、そこに出版社が販売していない出版物が多くあり、「宝」と感じた。図書館の郷土資料コーナーにある資料に光をあてるにはどうしたらいいかも考えていきたい。

●野山 宗一郎

1◆「リニアはなぜ失敗したか」川村晃生編（緑風出版）2023年7月

リニア新幹線は、時代遅れの事業であり、衰退途上国の無為無策の象徴である。このことを10名の慧眼の住民や識者らが様々な角度から鋭く指摘し、平易に解説する書である。問題の本質は、旧技術の乗り物に、安全対策、残土処理、都市地下空間や南アルプスの自然環境破壊などを載せたまま、奈落へと暴走するJR東海の経営姿勢とその財政破綻を支える政治にある。JR東海は2023年末にようやく、開通時期を「2027年」から「2027年以降」に変更したが、静岡県工区（だけ）が未着工であることを理由にあげて、問題を矮小化している。しかし、すでに全線各地で工事が数年程度遅れていて2037年開通も疑わしい。主要メディアがJR東海の「広報」機関というような皮相的な報道姿勢であるのに対して、本書は、沿線の環境被害や住民の反対運動などの取材にもとづくフリージャーナリストの「調査報道」の結晶でもある。

2◆「コモンの「自治」論」齊藤幸平+松本卓也編（集英社）2023年8月

新自由主義によりコモン（公共財・共有財）が資本によって収奪されている危機感から、その再生を「自治」により図ろうとする試みの書である。7名の識者が様々な角度から論じている。

本書の「はじめに」を読んで、「自治」（自主管理）は、その組織の大きさによって、アナーキズムからポピュリズム・全体主義までと背中合わせという危険性を感じる。民主主義と共通する問題といえる。

第3章の岸本聡子氏の「<コモン>と<ケア>の両輪」、「<コモン>の再生を目指す運動が資本主義が抑圧する<ケア>の分野とそこで働く人々を守ることになる」、「<コモンとケア>の結節点に地方自治の原点がある」は注目してよい。

第4章の木村あや氏の「武器としての市民科学を」では、「市民科学が社会にどのような貢献をしてどのようなジレンマに直面しているか」が整理されている。

3◆介護保険制度が破綻の危機にあることについて警鐘を鳴らす報道3点

・11/10(金) 19:00~21:00 WAN、WABAS、Arc Times 共催オンラインシンポ

【岸田政権の保険「詐欺」を止める！ 介護保険改悪を押し戻すのは今】

<https://www.youtube.com/watch?v=sWZvZfUwbII&t=9909s>

・週刊東洋経済 2024年2月17日号

第一特集「ヘルパーが消える、サービスが受けられなくなる日 介護 異次元崩壊」

<https://str.toyokeizai.net/magazine/toyo/20240213/>

・NHK 時論公論「介護保険制度の改正案 将来に残された課題とは」2024年1月25日 牛田正史 解説委員

<https://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/100/491239.html>

●鈴木 綾

1◆本 『ヘルシンキ生活の練習』 朴沙羅 筑摩書房

なんだろう、このタイトルという疑問を持ちながら読み始める。著者は社会学者。漠然といいところだと感じたフィンランドで、仕事を見つけ、2歳と6歳の子連れで行く。日本で働く夫氏は日本に残されるが、夫氏は彼女がやりたい仕事を得たことを「すごいじゃん！おめでとう」と祝福する。幼児二人連れて一人親で海外で働く、なんでそんな苦勞を？と思うが、その子連れに実は深慮があった。著者は日本国籍を持つ日本人だが、子どもの頃、その名前が原因で韓国人だ朝鮮人だといじめられた。朴という姓で日本国籍を持った筋金入り？の父上は、『それはイジメではなくて民族差別である』と「問題を変換した」。著者は同じことが我が子に起きたとき、「自分はあるなにうまく変換できるか、できない不安があるのなら、組み合わせを変えた方がいい」と、日本から「逃げた」のだと。いろんな国の子がいる場で、「雑音」なく自分が何人かを子ども自身が腑に落ちればいい、と。

「生活の練習」は「困りごと」をしかるべきところに伝えることから始まる。著者が一人親子育てに行き詰まったとき、ネウボラ(おお、これは外国人にも適用されるのか!)の保健師は非常に具体的に助けを提案してくれる。その「人」が問題なのではなく、問題が何かを見極め、その問題を解決するのが大事という考え方。それは保育の現場にも学校教育にも貫かれているようだ。その子が「問題児」なのではなく、問題が起きているスキルが足りないところを解決する。問題を起こしている子や問題の状況を「叱る」のではなく、具体的なモノ(人形や絵本)を使って子どもが考える材料を持たせ、「話し合う」。1歳児でも大人でも、スキルの足りないところは練習すればいい。一生スキルの向上は図れるのだと。もっともフィンランドは理想の国ではなく、問題がない国でもない。「戦争の博物館」について著者は、「戦争は悪である」という思想がないことに驚いたと。差別もあり、失業率も高い。それでも著者の描く

子どもとの日々から「子育て」には、子どもに沿って「手厚い」と感じる。単純にスタッフ数、クラス人数だけでも。「人格を評価してはいけない」という「教育政策」からも。

著者インタビュー(neol.jp)で著者が言う。「この本で伝えたかったのは、具体的に変えられることはたくさんあるということです。(中略)問題と自分は切り離せます。問題を自分の中に見つめてしまうと自分一人に対応するしかなくなりますが、問題の方を見れば、その問題を通じて自分以外の人も協力できるはずなんです。当事者性にフォーカスすると誰にだって、凡庸で空虚な差別者にだって、当事者として語れる辛い事柄があるでしょうよ。だから辛さで勝負したって仕方ないじゃありませんか。お前の話をしてるんじゃないんだよ、問題を解決したいんだよって持っていきたい。そのような考え方を練習し、連帯していくことが、個々人がいいなと思う生活に近づくために必要なスキルなのではないでしょうか。」……そうなのね!ふむふむ…でした。

2◆芝居 こまつ座『闇に咲く花』 @紀伊國屋サザンシアター TAKASHIMAYA

井上ひさし「昭和庶民伝三部作」第二弾として1987年初演。2023年こまつ座40周年公演としての再演。

南の島で戦死したと思っていた息子は記憶喪失になって生きていた。戦後2年経って帰国した息子を貧乏神主の父は驚喜して迎える。しかし、その息子をGHQの調査員が執拗に追ってくる。息子には現地で住民虐待をした戦犯の疑いがかけられていたのだ…。

息子役は松下洸平くんが演じた。彼のファンクラブのチケット販売もあったそうで、会場にはいつものこまつ座には意外なほど若い女性が多かった。彼の演じた気のいい息子の「忘れてはいけない」ということばが迫ってくる。記憶喪失していたことがよみがえってくるにつれて、戦後2年の変わりように浮かれるな、立ち止まれ、という意識が生まれてくる。それは舞台を見ている者にも響く。私が父や母から聞いた「戦争」の断片。それを「忘れてはいけない」と。野球バカだった息子が全てを「思い出した」とき、やってくる結末のショック。神社とはどういう場なのかも突きつける芝居。井上ひさしの脚本が今の世にもあまりにヒットしてリアルで、終わった後も座席からなかなか立てなかった。そして、松下洸平くんはとてもステキな役者だった!

3◆芝居 青年劇場『星をかすめる風』 @紀伊國屋サザンシアター TAKASHIMAYA

小説『星をかすめる風』(イ・ジョンミョン 著 / 鴨良子 訳 論創社)を元にした芝居。この小説は朝鮮人留学生だった尹東柱(ユンドンジュ)が治安維持法違反で福岡監獄に捕らわれていた日々を、看守として「見届けた」日本人学徒兵・渡辺の記録の形で書かれている。ユンドンジュは詩人(の卵)として反古紙に詩を書き続け、囚人達の手紙の代筆を引き受けていた。囚人に許されたささやかな楽しみとして風を上げ、塀の向こうへ、監獄の外へ想いを乗せた詩を飛ばす…。文学を学び、詩の意味を知る渡辺には自分の仕事の空しさと愚かさを思い知らされる出会いだっただ。その後、囚人に激しく暴力を振るうので嫌われていた看守が殺されて見つかると、渡辺はその犯人捜しを命じられる。何が起きたのかを追ううちに、渡辺ははじめに見えていた「殺人」が全く意味の異なるものだったと気づく…。小説には実在の人物が登場するがこれはあくまでも小説で、ユンドンジュに何が起きたのかは今もわかっていない。が、この小説は一つの解として、いかにもそうだったかもしれないという恐ろしい最期を示している。読んでいて日本人として本当につらく、苦しい思いを味わったが、ユンドンジュの美しい詩句に親しむ機会になった。そして渡辺の苦悩の深さは著者の日本人への信頼か祈りなのかもしれないとも感じた。

その小説から青年劇場が芝居を創る! 青年劇場は子どもたちと子ども劇場の高学年例会で何本か見たが、ど

れもとてもおもしろかった。笑える場面の連続の中にいつもハッとしたり、視点を反転するような「何か」のある芝居が多かった。小説の中のユンドンジュが舞台ではどんな姿で現れるのか？脚本・演出はシライケイタ。初演は2020年。初演はコロナ禍で入場者数制限付きだった。今回の再演は人数制限なし。シンプルな舞台装置だ。あの長くて時系列もわかりにくい小説をなんと上手に捌いたものだ。終幕でユンドンジュは朝鮮語の自作の詩を朗読する。字幕でことばの意味も見えるのだけど、その意味を追うよりも響く音韻がとても美しかった。

生前には詩集を出すこともなかった若い詩人の憧れの籠もった詩句。永遠に若いまま終わってしまった人の、生きていればどんなにかと思わされる美しいことばの響き。芝居の魅力も再確認。小説の著者が観劇に来ていて、終演後に紹介され、日本語はわからないがとてもよかったと感想を言っていたのも、妙に納得の舞台だった。

●林 浩二

2023年は約90の館・展示を訪問しました。その中から3つを取り上げます。企画展はいずれもウェブサイトでも情報が得られるものを取り上げました。

1◆蔡國強 宇宙遊 ―〈原初火球〉から始まる

国立新美術館（東京都港区） 会期：2023年6月29日（木）～2023年8月21日（月）

https://www.nact.jp/exhibition_special/2023/cai/

蔡國強は火薬・花火を使った作品で知られています。記憶に新しいのは、室内で火薬による作品制作も行った2015年横浜美術館での個展*。今回は、デビュー当初からこれまでの作品の発展がわかる展示とともに、LEDを使った、新作の大きな動く作品もありました。蔡國強は1986年から9年ほど日本に滞在して、いわき市などで地域の住民と交流し支援も受けて、火薬・花火による作品制作を開発・発展させてきたことが知られており、その交流の記録も展示室脇の情報コーナーで展示されていました。今回の展示の開幕の直前にいわき市の海岸で実施された花火作品《満天の桜が咲く日》の動画も感動的でした。個人的には同い年の作家として今後も注目していきたいと思います。

* <https://yokohama.art.museum/special/2015/caiguoqiang/summary.html>

2◆常設展示 兵庫県立考古博物館（兵庫県加古郡播磨町）

2007年10月開館。2023年12月訪問

https://www.hyogo-koukohaku.jp/modules/info/index.php?action=PageView&page_id=35

この常設展示はハンズ・オン展示を軸に構想されたことで知られています。開館10周年の際に当時の関係者が集まってふりかえった対談の記録は同館の研究紀要に掲載され、PDFは公開されていて貴重です。

最終的な展示制作に先立って、テスト模型を作って実際に子どもに体験してもらって、参加者に話を聞いて改善につなげること（制作途中評価）も行われました。

染川香澄・秋山眞・鮫島泰平・井上禎人・赤嶺剛央・東原由季・多賀茂治・高瀬一嘉・藤田淳・中村弘. 2018.

兵庫県立考古博物館開館10周年記念・博物館研究 座談会「実証・兵庫県立考古博物館の誕生～新しい参加体験型展示の模索～」の記録. 兵庫県立考古博物館研究紀要 11号: 73-110.

以下の刊行物のページからPDFがダウンロードできます。

https://www.hyogo-koukohaku.jp/modules/book/index.php?action=PageList&category_id=6

3◆森美術館開館20周年記念展 私たちのエコロジー：地球という惑星を生きるために

森美術館（東京都港区）2023年10月18日（水）～2024年3月31日（日）

<https://www.mori.art.museum/jp/exhibitions/eco/>

美術館で環境を直接のテーマにした大きな展示として注目しています。34人の作家による約100点の展示は、必ずしも「統一感」はありませんが、（環境のことを）考える／考えさせる展示となっています。撮影自由。展示図録には出展している作者の他の作品も出ていて、作家や作品の理解に役立ちます。1950年から現在までの年表には、環境と社会に関わる様々な事項が出ていて、資料的価値があると思えました（図録には未収録）。

番外◆和食 ～日本の自然、人々の知恵～展

国立科学博物館（東京都台東区）。2023年10月28日（土）～2024年2月25日（日）

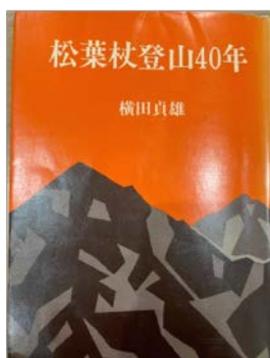
UNESCO 無形文化遺産に選ばれた和食について、「和食」とは／列島がはぐくむ食材／和食の成り立ち／和食の真善美／わたしの和食／和食のこれから、という章構成で展開しています。科博展示としては、これまでにないくらい総合的。

2024年～2025年にかけて、山形・宮城・長野・愛知・京都・熊本に巡回を予定しています。なお会場ごとに章構成は異なることがあるようです。

<https://washoku2023.exhibit.jp/outline.html>

●谷 敦 @市民研4年生

I ◆TV番組『片足で挑む山陵／桑村雅治』～本『松葉杖登山40年／横田貞雄』



「片足しかない人が山に登るなんてあり得ない」という私の常識は、この人たちの存在と行動、そしてそれを記録した映像と書籍により、物の見事に砕け散りました。

幼少期に病のため片足を切断せざるを得なかった男が、40代半ばで初めて登山を経験してその魅力を知り、その後『日本百名山踏破』を目指して挑戦中。現在60歳の彼は既に65峰に登頂し、3年後の目標達成を目指す。

夢のような話だが、これはトリックでもマジックでもない現実の話。

しかも、「こんなバカなことを試みるのは自分しかない」(本人談)と思ったら実は明治生まれの大先輩がいたというのにも驚く。

現代人の桑村氏は当然ながら、長さ調節可能な金属製クラッチ、現代の登山装備を駆使するが、大先輩の活躍した時代にはそんなものはなく、驚いたことに横田氏の場合は、普通の木製松葉杖、浴衣に下駄ばきといういでたちであったという(50年前に発刊された本の写真で確認出来る)。

我々の狭い常識に照らせば、彼らの行動は危険を顧みない無謀なこととも思われがちなのだが、二氏に共通する思いは「安全第一」。「自分がもし失敗したら『馬鹿なやつ』と嘲笑されるだけ。そして後に続く人もいなくなる。そんなことは絶対に出来ない」そう考える彼らはどんな時でも冷静沈着。危険を察知すれば、潔く登頂を諦め、策を練り直し、もう一度やり直す。その地道な繰り返しの上に記録を積み重ねていく。そして、自身の記録に挑戦しながらも、ハンデを負った人々が山登りの楽しさに出逢える機会を作り続けていく。

そんな我々の常識を遥かに超えた世界に挑み続ける新旧二人の山男達の貴重な記録です。

2◆Mother House トークイベント 《途上国の職人との対話》

「途上国から世界に通用するブランドをつくる」をうたい文句に、様々な製品を作り出して来た Mother House が時々企画する、我々日本の消費者と現地スタッフとの対話に2回参加して来ました。

1回目はバングラデシュの皮製品加工工場の製品検査責任者。途上国の安い人件費を利用し利益を上げようとするほとんどの先進国企業では、現地の人を「安い労働力」としてしか見ず、責任ある役職は与えないのが通例と思われそうですが、Mother House の皮製品加工工場の製品検査責任者はバングラデシュ人です。

彼自身、皮製品の製作工程を熟知した職人で、周りからの信頼も厚い人なのは言うまでもないことですが、こういう人を、対等なパートナーとして時間をかけて育てている Mother House の、うたい文句だけでは決してない会社としての姿勢に共感しました。

こうして、製品と金銭だけがやり取りされるのではなく、生産者と消費者(使用者)とが顔を合わせ、互いの社会や生活の背景も共有し、使用状況も確認できる場が設けられていることは、双方にとってとても貴重だと感じました。

そして2回目のイベントで更に驚いたのは、その数日前に開かれた株主総会での決定。

なんと、バングラデシュ人の工場長、マムン氏が日本の Mother House 社の取締役の一人に就任したというのです。前回、製品検査責任者にバングラデシュ人を当てているだけでも驚いたのですが、今回の発表には

驚きを乗り越えて感動を覚えました。

当のマムン氏も「これは私個人ではなくバングラデシュ人皆の喜び」と述べていましたが、その言葉を聴きながら私は「これは我々日本人にとっての喜びでもある」と感じました。

最近の若者たちは……(という言い方には辛口のコメントが付くことが通例かもしれませんが、私はこう続けましょう)……我々の世代では思い付きもしなかった、深いギャップをにこやかに、軽やかに飛び越えるしなやかさがあることを嬉しく頼もしく思いました。



21世紀になっても、戦争や殺戮、分断や憎しみの連鎖が絶えず、人類は果たして本当に進歩しているのだろうか、と懐疑的になることも多い世の中ですが、地球の片隅で、小さいけれどしっかりと目に見える変化が起こり始めていることに気付かされ、人類は、今はまだほんの一部でしかないかもしれないが、でも少しずつ進歩はしているのかもしれないと思わせてくれるイベントでした。

3◆関東大震災100年展 堅山南風／半蔵門ミュージアム

関東大震災から100年に当たる2023年には様々な展覧会が各地で有ったようです。誰もが簡単にスマホでカラー写真も動画も撮り、保存できる今のような時代とは違い、100年前には白黒写真も動画撮影も大変な手間のかかる作業で、普及には程遠かった頃のことです。そんな時代に生きた絵師たちの『記録者』としての視点を感じました。



堅山南風は横山大観の弟子に当たる方だが、当時住んでいた巣鴨で被災しこの時の東京の姿を記録に残さなければと、各地を歩き回り、様々な市井の人びとから話を聞き、数年を掛けて完成させた絵巻。上・中・下の3巻。

ただ、絵師の目線で捉えたものなので、それは、現実の惨状を冷徹に記録することとはちょっとズレているかもしれないのですが、例えば、本人が実際に見ていないはずの、浅草の凌雲閣の崩れ落ちる様をまるでスローモーション画像のように描き、不思議な臨場感とユーモアに満ちています。

それは自分の目で見た事実と、人びとからの話を合体して絵師の頭の中、想像力で作り出されたフィクションという見方も出来るのですが、フェイクニュースや「もう一つの真実」が横行する現在から見るとそれは遥かに理解し易い真実を描写したものと私の目には映りました。

F.トリュフォーが50～60年前に作った『アメリカ式夜』という古い映画を思い出しました。

ビル街の一角にある小さな美術館で、スペースも決して広くはないのですが、展示物の質はかなり高く、さほど混むこともなく美術品と相対する時間がゆっくり楽しめました。今回の特集ではありませんが、常設展示されている運慶作の大日如来坐像も仏像好きの方にはたまらない魅力でしょう。

●山口 直樹

1◆斎藤幸平『マルクス解体—プロメテウスの夢とその先』(講談社,2023年)

著者の斎藤幸平は1987年生まれで『人新世の資本論』(講談社)がこの種の本としては異例のベストセラーとなったことはよく知られている。

この『マルクス解体』はもともと英語で発表された著書を日本語に訳したものである。

副題にあるプロメテウスとは、ギリシャ神話に出てくる神で自然の猛威や寒さにあえぐ人類に同情し、全知全能の神ゼウスの目を盗んで火を人類に与えた神のことである。

はじめ火を手に入れた人類は、自然の力に打ち勝ちプロメテウスの願い通りに技術や文明を発展させ

ていった。人類はプロメテウスの火の力で原子力のような自分たちの力では制御できないリスクの大きな科学技術を発展させ大量の化石燃料を燃やすことで地球規模の気候変動の影響で燃やし尽くそうとしている。

人類の擁護者であるプロメテウスの「夢」は「自然支配」という人類の夢に転化した。

しかしその自然支配に夢が、私たちの暮す文明の危機を引き起こすに至っている。

本書では「現在のパンデミック、戦争、気候崩壊は、すべてソ連崩壊後の「歴史の終わり」と資本主義のグローバル化がもたらした事態であり、民主主義、資本主義、生態系を慢性的な危機に陥れているのだ」(8頁)という認識に立ち、その処方箋を示そうとする。

著者の斎藤は、その処方箋が、マルクスの思想に含まれているとするのだが、マルクス主義はソ連の崩壊とともに終焉したのではなかったか、マルクスは「死せる犬」だという声に「否」と答える。

たしかにソ連崩壊以後マルクス思想は、今日ではもはや受け入れることのできない生産力主義や自民族中心主義にとらわれていると繰り返し指摘を受けてきてはいる。

そこで著者が本書でなそうとすることは、「史的唯物論」という「生産力」と「生産関係」の間の矛盾を進歩の動力とするような歴史観に依拠するマルクス像を解体する試みである。

本書の題名、「マルクス解体」となっているのはそのためである。

本書のキーワードの一つは、物質代謝であろう。

マルクスは、『資本論』(1868年)第一巻で「労働は人間と自然の一過程である。この過程で人間は自分と自然との物質代謝を自分自身の行為によって媒介し、規制し、制御するのである」と書いている。マルクスは「労働」を人間と自然の物質代謝に関連付けて定義している。そのような意味でマルクスは自然に着目してはいたのだが、この時点では自然科学の研究の知見を取り入れることができなかつたため「マルクスのエコロジー」という側面は見落とされることになった。

本書で著者が注目するのは、マルクスが『資本論』を刊行した1868年以降のマルクスである。マルクスはこの年以降、自然科学の研究に関心を示し、リービッヒの『農芸化学』から膨大な抜き書きをつくるなどということをはじめているからだ。

これはMEGA版の全集に収録されており確認できるようだ。

さらにマルクスはリービッヒの著作だけでは、資本主義の引き起こす環境問題を批判するには十分でないことを自覚しており、1868年以降自然科学の勉強により熱心に取り組んだ。

そこにはリービッヒの土壌疲弊や化学肥料の扱いを明確に批判した人物や文献も多く含まれているという。またマルクスの自然科学研究の幅は非常に広いもので地質学、化学、鉱物学、植物学などの幅広いトピックを扱っていたことが指摘されている。

それを踏まえマルクスの抜粋ノートには、過剰な森林破壊、家畜の残酷な扱い、化石燃料の浪費、種の絶滅という新しい領域まで及んだことが記録されているという。

またマルクスは、1868年に植物学者のフラスの著作を熱心に読み込んでいたことも示される。フラスは、土壌疲弊があらゆる文明衰退の原因であるというリービッヒの誇張した表現を厳しく批判している植物学者だった。フラスは『時間における気候と植物界』(1847年)で地球の気候を変動させる過度の森林伐採こそ近代ヨーロッパ文明にとっての脅威だと警告した。マルクスはこの植物学者に学ぼうとしていた。

またマルクスは、ウィリアム・スタンレー・ジュボンスの著作も熱心に読んでいた。

ジュボンスは、イギリスの石炭の枯渇を警告する人物であった。

こうした事実から浮かび上がってくるのは、1868年以降マルクスが、自然科学、社会科学、人文科学の学際的研究を通じて理論的な大転換を遂げようとしていたという事実であった。

そして著者は、マルクスのポスト資本主義を「脱成長コミュニズム」として打ち出している。マルクスの「史的唯物論」による生産力主義やヨーロッパの植民地主義を容認するヨーロッパ中心主義者というマルクス像は、1868年以前のマルクス像であり、これらは1868年以降のマルクス像には当てはまらないということになる。

1868年以降のマルクス像に影響を受けフォスターやレヴィは、環境社会主義という理念を掲げるに至っている。問題は本書で掲げられた「脱成長コミュニズム」や環境社会主義をどう具体的に実現していくかにあるであろう。

ソ連の社会主義政権の側が水爆実験を行ったり、チェルノブイリで原発を推進していたりしたことは、マルクスの自然や自然科学に対する認識の深まりを無視していたといわざるを得ない。それは現在、社会主義を標榜する中国が世界一の原発大国になろうとしている現実からもそれは見て取れるように思われる。

マルクスの思想が重要なのは、マルクス主義が無謬だからではなく、マルクスの取り組んでいた問題が時代の核心部分だったからである。その意味で言えば、この書はマルクスが、資本主義による環境破壊という核心的な問題に取り組んでいたことが示されたといってよい。資本主義の生命力があまりに強靱なため、資本主義が永遠に続くように思えるかもしれないが、それは錯覚だろう。資本主義にも寿命はある。その資本主義の最大の弱点は、資本主義自身の力では自然環境の破壊を食い止められないということにある。

本書は一般向けに書かれた『人新世の資本論』（講談社）より理論的な書でマルクス主義の歴史にも深く分け入っている。その意味で少し難しいかもしれないが、既成のマルクス像を再考する意味でおすすめしたい一冊である。

2◆トーン・ホルステン(赤坂桃子訳)『フッサールの遺稿—ナチから現象学を守った神父』(左右社,2023)

マルクスの『資本論』(1868年)と同様に重要な古典として知られる書としてエドムント・フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』(1936年)をあげることができるだろう。

フッサールは、このなかでガリレオ・ガリレイを取り上げ「ガリレオは発見する天才であるとともに隠蔽する天才である」と書いた。

これはガリレオが、自然を数学の衣にかけ、数式で書けるもののみを実在するものとみなすことによって、数学的に書き表せないものを隠蔽し、生活世界(Leben Welt)を忘却の淵に追いやってしまうことを指摘した言葉である。これは生活の科学、暮らしの科学をいう市民科学と少し似ているところがあると感じないわけではない。

フッサールは数多くの弟子をもち、後継者を育て、独自の学派を形成した哲学者で、その著作を基礎にして幾世代にもわたってさらに哲学者が育っていくだろうと考えていた。フッサールは、自然科学が急速に発展した十九世紀の末期に、世間の脚光を浴びた。数学と自然科学の言語が論考をつかさどり、

支配した。そこで哲学は、みずからをもう一度定義しなおさなければならず、依然として変化をつづける世界で一つの居場所を探し求めた。

フッサールが、まず数学で学位を取得し、それから哲学に転じたことは、彼の思想にとって明らかに決定的な意味をもっている。フッサールにしてみれば、数学があらゆる論理的な構造の理論の尺度なのは、自明のことだった。自然科学が厳密に説明する学問に発展して、十九世紀に長足の進歩を遂げ、その影響が現実のほとんどすべての領域に拡大したのは、自然科学が数学および数学的思考と緊密に結びついたおかげだと考えた。

急速に影響力を拡大していた近代科学に対して哲学の果たすべき役割は何かということをつッサールは、考えていたのだろう。

そこでフッサールが、創始したのが、現象学だった。現象学的還元を方法論とする現象学は、ドイツの哲学者に大きな影響を与えた。このなかで特筆すべきは、マルチン・ハイデッガーだった。ハイデッガーは、フッサールの現象学に近さを感じていたようでフッサールとは当初、師弟関係のような関係だった。フライブルグ大学のフッサールの後任教授は、ハイデッガーだった。しかしナチスが政権をとった後、ハイデッガーは、1933年から1934年フライブルグ大学の学長に就任し、ナチスに接近していた。フッサールは、ユダヤ系の人だったためナチスから「退廃」哲学者の烙印を押され、迫害されていた。このような状況の中、両者の師弟関係にはひびが入ることになった。現象学の影響はドイツにとどまらなかった。隣国のフランスでは、サルトル、メルロ・ポンティなど現象学に影響を受けた哲学者が活躍した。東アジアの日本や中国にも影響を受けた学者は多数いる。北京の古本市や書店で私は、現象学に関する本を何度も目撃している。

1930年代のドイツでは、フッサールの著作は刊行することが非常に困難な状況だった。

そのため1938年にフッサールがなくなった時、未刊行の遺稿は、4万ページにも及んだという。この遺稿をドイツ国外に持ち出そうと考えたのが、本書で扱われているフランシスコ会修道士、ヘルマン・レオ・ファン・ブレダ神父である。

1936年夏からフッサールの著作を研究していた彼は、1938年8月に27歳になった。1936年から37年にかけての学期に、彼は当時ちょうど設立五十周年を迎えていたルーヴェン大学哲学部で、哲学の基礎課程を修了した。彼はフッサールの研究で博士論文を書こうとしていたという。ルーヴェン大学はベルギーにある1425年創設のカトリックの大学で人文主義者のエラスムスが教鞭をとっていたことでも知られる大学である。

中国から翁文灝が、この大学に留学し1912年、地質学の博士号を取得し、中国史上、最初の地質学博士になったことでも知られる。

かくしてヘルマン・レオ・ファン・ブレダ神父は様々な困難を乗り越え、フッサールの4万ページに及ぶ遺稿を守ることに成功する。私は、フッサールがナチスに迫害されていたことは知っていたが、フッサールの遺稿をナチスから守ったヘルマン・レオ・ファン・ブレダ神父のことは全く知らなかった。この神父がいなければフッサールの遺稿は、ナチスに没収され、廃棄されていたかもしれないのだ。このノンフィクションには感銘を受けたので、ここに紹介することにしたい。

3◆松本賀久子『「ジャミラ祈念日/被爆者ゴジラ」－ウルトラ怪獣のためのレクイエム』

(土曜美術社 2022)

本書は、いささか特異な詩集である。それは副題をみるとよく理解できる。すなわち1966年に放送の始まった特撮テレビドラマ「ウルトラマン」にでてくるウルトラ怪獣たちを追悼している詩集だからである。「ウルトラマン」(1966)においては、はじめて怪獣退治の専門家が登場し、一週間に一回新しい怪獣が登場するテレビドラマが放送されたのである。

それまでは、怪獣映画などで映画館で見るしかなかった怪獣が、このウルトラマンで身近なものになったのである。

この「ウルトラマン」という番組において主役は実はウルトラマンというよりは、怪獣であった。「ウルトラマン」に毎週、敗れても敗れても子供たちの人気は、ウルトラマンに集まらず、怪獣に集まるといふ逆説的な構造にこそ、ウルトラマンの意義は存在するといっていいたいだろう。この「ウルトラマン」には、佐々木守、実相寺昭雄、金城哲夫といったすぐれた才能が、投じられており、子ども向け特撮番組とはいえクオリティの高いものが多かった。著者はこの番組を幼少期にリアルタイムで見ていたようだ。この詩集で追悼されているのは、宇宙忍者バルタン星人、棲星怪獣ジャミラ、三面怪人ダダ、チョコレート怪獣ゲスラ、友好怪獣ピグモン、どくろ怪獣レッドキング、ミイラ怪獣ドドンゴ、油獣ペスター、夕吹き怪獣ガマクジラ、二次元怪獣ガヴァドン、四次元怪獣ブルトン、凶悪宇宙人ザラブ星人、高原竜ヒドラ、毒ガス怪獣ケムラー、古代怪獣ゴモラ、黄金怪獣ゴルドン、伝説怪獣ウー、悪質宇宙人メフィラス星人、メガトン怪獣スカイドン、宇宙恐竜ゼットンである。

ここまでは「ジャミラ祈念日」の内容だが、ここに「被爆者ゴジラ」の第二部を付け加えて本書は、22年ぶりに復刊された。

著者は、「被爆者ゴジラ」でゴジラを以下のような詩で追悼する。

私は
貴方を
ヒバクシャと呼ぶ

もう英単語にも
なっている
HIBAKUSYA

水爆実験で
うつろにみちたりた
眠りからさまされた HIBAKUSYA

手帳のない
ヒバクシャ
街を踏みつぶし放射能を振りまく

地球の怒号で叫び

自らの
身体の放射能で燃えている

誰にも否定できない
貴方は
HIBAKUSYA

ヒバクシャである事を
貴方は
知らないだろうが

他でもない
貴方は
被爆者ゴジラ

「手帳のないヒバクシャ」というところがいいが、著者は2021年3月17日にコロナ禍によって死去してしまった。59歳だった。というわけでこの紹介も著者へのレクイエムということになる。

著者はあとがきにおいて「高度経済成長期のなかでウルトラマンにいや私たちに殺されなければならなかった怪獣たち。ウルトラマンが放送されていた時、私は小学校の低学年でした。殺される怪獣は可哀そうだ。そう思いながらもウルトラマンが、無事に「征伐」してしまうとほっとして寝についたものでした。

しかし、そうして手に入れた経済的な豊かさ、安全のなかで、私たちは当時考えていたような幸せな生活をしているのでしょうか。どうもそうは思えません。」と書き、それに続けて、「むしろ彼らと共存することができていれば、私たちの暮しも違ったものになっていたはずです。地球環境の破壊や、いたるところで起こっている宗教(実は経済)紛争を見るにつけそういう思いを抑えることはできませんでした。」と書いている。

この著者もまた「怪獣があらわれた。怪獣を殺せ」ではなく「怪獣があらわれた。人間が変われ」と思考するタイプの人であることがわかる。そうでなければそもそもこういう詩集は刊行しないだろう。この本に解説を加えている原田実氏は、『怪獣のいる精神史ーフランケンシュタインからゴジラへ』(風塵社 1995)の著者だが、松本氏とは夫婦関係であることが判明した。同じ関心を共有した夫婦だったということだろう。レアな詩集ということでご記憶いただければ幸いだ。

【付記】みすず書房の『みすず』がなくなってしまうらしい。毎年1月に『みすず』で読書アンケートがなされていた。ここには目利きの読書人が集まり毎年、本をあげていた。どんな本があがるのか、私は注目していた。なくなってしまうのは残念だ。

●上田 昌文

この原稿を書くために2023年に買った、目を通したり、読んだりした本をチェックしてみたが、それらはなかなかの数になってはいるものの、「おすすめ」してどれくらいの方が、その本を手にとってみてくれるだろうか、と思うと、かなり意気阻喪してしまう。私が読む本の大半が今は絶版の古本で、図書館に行っても、そこが小さな図書館なら置いてないだろうな、と思えるものばかりなのだ（1年に何十冊も新刊を買う金銭的余裕がないというのも大きな理由だ）。「流行や売れ筋には目もくれない」性向が私にはもともとあるが、歳をとるにつれて、それが著しくなっている（老化現象？）。ご存知のように「[市民研サーチライト](#)」や「[TV科学番組を語り合う](#)」などで新しい情報には目配りはしているし、月刊誌の『日経サイエンス』『nature ダイジェスト』『MIT Technology Review』は届くのが待ち遠しい、といった感じでもある。しかし、マスコミが取り上げている（持ち上げている？）ような論客や論説にはほとんど関心が向かない。「他人が何を言っているか」よりも「（他人にどう思われようと）自分で何をなせるか、作り出せるか」の方に注意が向き、そのため、「他人から見たらたいして面白くもないことに目を向けてしまっているのではないか」という気がなんとなくしてしまうのだ。例えば、一昨年から好きで始めたことの一つに[連続講座「サイエンスライターP.B.の作品世界を逍遙する」](#)があるけれど、この講座の準備のために英語の本を含む幾冊もの本を読んで参考にし、フィリップ・ボールの本の難しい内容を何とか噛み砕いて紹介しようと苦勞してきた。だが、講座の参加者が一向に増えないことからしても、「（おそらく英語圏では多くの人が世界最高のサイエンスライターの一人だと同意してくれるだろう）フィリップ・ボールの本を紹介しても、いったいどれくらいの方がそれを手に取ってくれるのだろうか？」と疑問に思ってしまうのだ。……

このような胸のつかえを抱えつつ、では、実用度の高い、誰にも楽しんでもらえる本でありながら、あまり知られていないだろうものなら、まずはいいかな、という気持ちから選んだのが次の著者の「ときあかし辞典」三部作だ。

1◆実用書で

円満字二郎『漢字ときあかし辞典』『部首ときあかし』『漢字の使い分けときあかし辞典』
（それぞれ2012年、2013年、2016年、すべて研究社）

「何をいまさら漢字の辞典？」という勿（なか）れ。試みに自分の名前の漢字一文字一文字を上記の辞典で調べてみるといい。痛く興味をそそる何らかの記述に必ず出会えるだろう。

例えば私の名前は「昌文」と書いて「あきふみ」と読むが、小中高のすべての卒業式で「まさふみ」と読み上げられたことからわかるように一ちなみに大学の卒業式は式自体を馬鹿馬鹿しいと思ったので出席していない一、初対面で「あきふみ」と読んでくれた人はいない（ただ一人だけ例外がいて、それはある郵便局の窓口の職員だった。「ふりがな」を振っていないはずなのに、「あきふみ、さん」と呼ばれて、私はえらく驚いた）。「なんで、まさ、と、あき、の2つ読み方があるのだろうか？」一名付けたはずの自分の親に尋ねてもちゃんと教えてもらえなかったのに、その理由がこれらの辞典をみるとはっきりとわかる。ついでに、「昌文」の「文」は、「文字」の「も」であり「文様」の「もん」であり、「ぶん」「ふみ」とも読むが、それらがどうつながっているのか、といったこともわかる。さらに、「上田」の「上」は「あげる／あがる」だが、では、「上、挙、揚、騰」の4つがどう違ってどう関係しているか、といったことも。

大多数の日本人にとって、小学校時代に有無を言わせない押し付けで2000字ほどを覚えさせられた漢字ではあるが—私も「書き取りテスト」で満点を取り続けることに熱中した時期があった—このほぼ唯一の現存の表意文字が持つ歴史的文化的奥深さには計り知れないものがある。そんなことなどまったく意識しないで、何気なしにさらさらと手書きして、あるいはPCで「変換」して、漢字を当たり前に使

っている私たちは、「漢字の辞典」をとおして、文化というものの巨大な連続性と共同性の厚みのなかに自分がいることを、たった「一文字」だけからでも端的に感知させられるのだ。

通常の漢和辞典一冊に加えて、この円満字氏の三冊、そしてできることなら白川静の（もっとも初歩的な辞典である）『常用字解』（平凡社、2003年）を常備しておけば、漢字の世界をいつも身近に引き寄せておくことができるのではないだろうか。

なお、円満字氏には『漢和辞典に訊け!』（ちくま新書 2008年）という漢和辞典というものの意義、面白さ、使い方をやさしく説いた素敵な本があることを付言しておく。

今の辞典の例では「実用性」と言いつつ、じつは文化と学問を自分で探索していくための「道具」という意味を、そこに込めることのできる場合があることをわかっていただけたらと思う。そうした道具のもう一つは、おそらく、やさしい言葉で書かれていながら、ある学問ならその学問が何をどう問題にしてどこに向かっていこうとしているのか、という人間の知的な営みとしてその学問が持つ特性を浮き彫りにし、読む者をしてその参画に誘うような—この学問の世界で創造の輪に加わることができたらどんなに素敵かと思わせるような—喚起力を備えている本であろう。それは一流の入門書、一流の入門的教科書、そしてしかるべき時機に出会う（その学問領域に関連した）古典、ということになるだろう。

若い時代にそのような入門書や古典に出会い、じっくりそれを学ぶことができれば、その意義は絶大だが、じつは、入門書や古典の意義はそれに限らない。例えば「市民科学」の活動に取り組む中で、ある科学系の専門分野にまったく素人である自分が、その分野の何らかの専門内容をどうしても読み解いたり、専門知識を使ったりしていかねばならない場合に、その分野の入門書や古典にふれることで、乗り越え難いと感じていた専門性の障壁を、うまく取っ払っていくことができたりするのだ。

つまり市民科学の観点から言えば、そのような入門書にどんなものがあるかを示し、それを楽しく上手に読みこなして身につけていく方法は何か、を提示できることが大切になる。

ここでは、上記の連続講座「サイエンスライターP.B.の作品世界を逍遥する」に関連して読んだり、読み直したりするなかで、科学史、科学論、哲学の「入門書」としてずば抜けて面白かったものを3つ挙げておく。2つは英語だが、多少の語彙力さえあれば、非常に読みやすい達意の文章になっていることは保証する。

2◆入門書で

①George Gamow "Thirty Years that Shook Physics: The Story of Quantum Theory"

(Dover Publications; Reprint 版, 1985、原著 1966年)

②アービング・M・クロッツ『幻の大発見 科学者たちはなぜ間違ったか』

(四釜慶治・訳、朝日選書 1989年)

③Bryan Magee "Ultimate Questions" (Princeton University Press, 2016)

①科学読み物「トムキンス」シリーズで有名な物理学者ジョージ・ガモフが、量子力学の誕生を描いた本。自身も当事者の一人であっただけに、非常に生き生きと概念形成（例えば「行列力学」の説明も秀逸）とそれらに関わった人物たちを描いている。日本語に訳されていないのがほんとうに不思議だ。

②一流の科学者がクロッツは生体の化学熱力学の分野で有名な教科書を書いている—自分が専門とする領域とその周辺に関連する科学史を、一次資料を使って読み解いて、自分の関心に応じて再構成すると、こんな面白い本ができるという見本、と言える。「何が科学者のものの見方を歪めるか」は普遍的で重要な問題であるだけに、科学者自身でその歴史的な振り返りをしていることが意義深い。このような視野を持った科学者は今、どれくらいいるのだろうか。

③上記連続講座の第7回目の準備で、ホッブスの『リヴァイアサン』を読む必要があった。が、その時間がとれず、良質の解説はないものかと思って、「そうだブライアン・マギーなら何か書いているかも」と気づいて、私が持っている彼の本（翻訳されている数冊）をパラパラと読み返してみた。私は、西洋哲学の解説者としてこの人以上の人はいないと思っているからだが（疑う人は、どうか彼の『哲学人—生きるために哲学を読み直す』（上下、NHK出版、2001年）を読んでみてください）、偶然にも年末に、その彼が書いた未翻訳の薄い本（127ページ）を古書店で見つけた。「究極の問い」に面して、私たちの無知（知ることができないという限界を含めて）はあまりにも広大であるように思える中で、何をどう理解していくべきなのか—執拗で真摯な問いかけを手放さないからこそ成立する誠実な生き方。哲学する者の姿が透けて見えるような本と言えるのではないか。

「入門的」を意識したわけではないけれど、私が2023年に聴くことができた素晴らしい音楽とその演奏については折々に「市民科学研究室メーリングリスト」に投稿してきた（※）。ただ、「皆に聴いてみて欲しい」と思うのは、「誰が聴いても、面白い、美しい、心地よい……といった、心を湧き立たせてくれる何かをすぐさま感じてもらえるだろう」という期待があるからだ。その意味で、どの投稿もよい「入門」になれば、との思いがあったとも言える。

2023年の、決して数少なくはない音楽との出会いも、「（まったく予備知識なしに）聴き始めて1分ほどで心を動かした曲やアルバムを登録する」というやり方を繰り返すなかで生まれたものだ。というのも、[NML（ナクソス・ミュージック・ライブラリ）](#)で毎日更新される「新着タイトル」をチェックしてその音源サイトのURLを保存し、そして本当に気に入ったものだけを後からじっくり再生して聴く、というのが今の私の音楽を聴くスタイルになっているからだ。

そうした中での出会いから、特に次の2点を挙げておきたい。

3◆音楽で

①コジマ録音[ALM RECORDS]の素晴らしさ

②ソプラノ歌手ルビー・ヒューズ（Ruby Hughes）の素晴らしさ

①は、「要チェック（保存）」にするアルバムが、多数あるCD制作元（レーベル）のなかでダントツに多いのがこの「ALM RECORDS」だったと、後から気づかされたから。ぜひ以下のウェブサイトアクセスして、興味を覚えたCDの情報を開いてみてほしい。日本人の作曲家・演奏家の比率がとても高く、そのことがまた、コンサート通いから遠ざかって、つい間近で活躍しているはずの音楽家のことを知らないで済ましているという私の偏向を、直してくれるようで、嬉しい。

<http://www.kojimarokuon.com/>

NMLに登録されているのALM RECORDSのCDは現時点で532枚のようだが、どのCDもそれぞれの曲（トラックごと）の冒頭の30秒が試聴できる。音質がいいことにも驚かれるだろう。

<https://ml.naxos.jp/label/ALM>

②は、2023年の私にとって音楽での最大の「事件」となった。サンドリーヌ・ピオー（Sandrine Piau）やキャロリン・ Sampson（Carolyn Sampson）など、エリー・アメリング（Elly Ameling）の後の世代で、その声質と演奏と創造的な仕事ぶりで深く魅了される—つまりその仕事をずっと追っていきたくなる—女性歌手が何人かいるが、もうすでにここ10年ほども活躍している中堅なのに、このルビー・ヒューズのことを、私はまったく知らなかった。

次のCDを聴いて心が震えたのが最初の出会いだ。

End of My Days 「わが人生の終わり - ソプラノと弦楽四重奏のための音楽」

<https://ml.naxos.jp/album/BIS-2628>

この歌手のウェブサイトが非常にモダンというか先進的というか、恐ろしくよく作り込んであるので、興味のある方は、以下をご覧ください。

<https://rubyhughes.com/>

レパートリーがすさまじく広いこと（おかげで、この人の歌をとおして、これまであまり馴染みのなかったいくつもの曲に親しむことができた）、

<https://rubyhughes.com/repertoire>

サンプルの音源や動画がじつに見応え聴き応えがあること、

<https://rubyhughes.com/media#strip-audio-interviews>

など、どのページにも圧倒されてしまう。

身体の隅々にまで染み渡る、極上の美声で奏でられる深みのある音楽—それとの出会いは、私にとって人生の最も大きな喜びだと思える。

※ 新しいものから古いものの順に並べて。関連するYouTubeの動画（★）も貼り付けておいた。

- ・冒頭の30秒を聴いて楽しむ、クリスマスの名品小曲の数々（12月23日）

<https://uedaki.exblog.jp/33214935/>

- ・三善晃没後10年の追悼コンサート（11月7日）

<https://uedaki.exblog.jp/33214930/>

★TRIBUTE TO MIYOSHI TOKYO

<https://www.youtube.com/watch?v=S4MHaBB4jdk>

- ・クリスマス・ミニ・コンサートのお知らせ（10月29日）

<https://uedaki.exblog.jp/33214929/>

- ・1991年生まれの二人の女性演奏者（8月14日）

<https://uedaki.exblog.jp/33214927/>

- ・「子ども」を描いた3つのピアノの名曲（7月12日）

<https://uedaki.exblog.jp/33214917/>

★Judith Jáuregui - Federico Mompou - Scènes d'enfants

<https://www.youtube.com/watch?v=F0riNa-DbrA>

- ・高橋望さんのバッハ、シューベルトを聴いて（6月11日）

<https://uedaki.exblog.jp/33214904/>

★Schubert Piano Sonata No 19 D 958 in C minor András Schiff + Encore

<https://www.youtube.com/watch?v=I9ud8BCDHcY>

- ・上林裕子のフルート作品が素晴らしい（6月3日）

<https://uedaki.exblog.jp/33214895/>

★Yuko UEYAYASHI Sonata for Flute and Piano | Leone Buyse & Tim Carey

<https://www.youtube.com/watch?v=tRL08zwjj70>

- ・クラシック音楽の楽しみ方・私説10か条（4月16日）

<https://uedaki.exblog.jp/33214888/>